

ポリネシアにおける養子・里子慣行

馬 場 優 子

I はじめに

仮りに「養取慣行」を実子ではない者との間に作り出される人為的親子関係の樹立に関する慣行と規定すると、それは多くのヴァリエーションを含みつつ、広範な地域に見出すことができる。

概括的に見れば、その動機ないし目的とするところは、社会集団ないし個人の危機的状況に対処するひとつの方策と見なし得る。たとえば、家系あるいは親族集団の系統の継続が困難となった場合に、相続・継承者を養取によって確保し、集団の存続をはかる、というように集団の成員補充の手段という側面が見られる。また、母親の健康状態が悪かったり、既にいる子どもの数が多すぎてこれ以上扶養者が増加するとその家族の生活を困難にさせられると思われる場合、子どもを扶養能力のある家族に引き渡すことにより、養出子の生活と社会化の場を確保する。同時に、家族成員数を減らすことによって養出家族の生活を保障する。また、高齢化した時、生活資源の取得や家事の遂行に必要な労働力を確保するために養取するという場合もある。このように、養取慣行は何らかの欠損もしくは不利な状況を補完あるいは打開して危機から逃れるための手段としての性格が顕著である。

ところでポリネシアは養取慣行の非常にさかんな地域のひとつだが、そこに見られるものは上記のような不利や欠損を補完するものとしての側面以上の意味を持つ。

本稿は、文献資料に依拠してポリネシアの養取慣行の特徴を導き出し、それを通して当社会における“parenthood”（親性、親であること）を理解するための一助とすることを目的とする。

II 養取慣行

一般に養子取り (adoption) とは、生みの親が子どもに関して持つ法的権利・義務が生みの親以外の者に恒久的に譲渡されることを指す。一方、里子取り (fosterage) とは一定期間のみ生みの親以外の者に養育が委ねられることで、親の持つ諸権利・義務は部分的にその期間のみ里親に委任される。従って、子どもの正式な親族関係上の地位や権利などに変更は生じない。このように概念上は区別されるが、ポリネシアには実際には養子と里子を区別していない社会や、単純な里子からより正式で長期の養子に近い里子までさまざまな形態が見られる。そこで実態としては区別しにくい養子慣行と里子慣行を併せて広義の「養取慣行」とし、この章において Nukuoro, Tonga, Ellice, Samoa の四つの（諸）島における実態調査を基にした資料を使用し、ポリネシアの養取慣行を具体的に概観する。

なお、ポリネシア各島では植民地化以後、近代化する中で養子縁組が手続き上整備され、地元の政府を通して Land Court に登録することが義務づけられた。しかしそれは未だに徹底されていず、近代法で認められた正式な養子縁組 (legal adoption) と裁判所に登録せず実親と養親の間の口

頭契約による慣習法上の縁組 (customary adoption) の二種類の養子縁組が存在するのが現状である。ここではこの二者を区別せずに扱うことにする。

1. Nukuoro 島民^①

Nukuoro 島民は10世紀ころカロリン 群島東南部の環礁に移住してきたポリネシア系の住民である。

養取は親族間で頻繁に行われる。1965年 Carroll の調査時には、養出先は子どもにとって祖父母、あるいは父母のキョーダイが49%、類別的祖父母、類別的父母 (父母の類別的キョーダイのみ)、類別的キョーダイが合わせて27%で、それより遠い親族が24%であった。また、祖父母および類別的祖父母による養取は、人口を勘案すれば類別的父母によるものより多かった。

以上のように養出先は専ら親族であるが、この社会では親族には本来、養出を請求する権利があると考えられているのである。養子縁組申し込みの時期はほぼ決っていて、妊娠が判明したら直ちに行うのが一般的である。その前であったり、出産後であったりしてはならない。従って養子の性別に文化的な選好は生じず、現実には養子の性別は男子、女子が半々ぐらいである。

養取契約の成立にあたって特別の儀礼や財の交換は行われませんが、養取予定者となった者は妊娠中と授乳中に子どもの母親に食物を贈り、出生時には子どもに衣類や石けんなどのささやかな贈物をする。子どもが養取者に引き渡されるのは初誕生を迎えて離乳が開始された頃である。

養子縁組は養出側の親と養取側の親がそれぞれ夫婦単位で合同で行う (joint adoption) のではなく、夫あるいは妻が個人単位で行うものである。とは言え、実の両親はそれぞれが子どもに対して権利を持っているから養出者となる親は配偶者の同意を要する。しかし、一般に養出の際の取り決めの時、主導権を握るのは母親である。時には地位や権力に対する野心から父親が身分の高い親族に子どもを養出しようとすることもあるが。

養取側も夫ないし妻が個人で養取行為を行う。Carroll の調査によると女 (妻) が養取者であるケースが若干多かった (養子縁組全体の68%)。しかし現実には配偶者も大きく関わりを持つ。とくに養取者が男である場合は、実際に子どもの世話をするのは妻なので妻の同意を得なければならない。また非養取配偶者 (単独で養子縁組をした夫あるいは妻の配偶者) は子どもに対して何の責任も義務もないので、養子に財産を残さないばかりか、虐待することすらあると言われている。その為生みの親は養取者がその配偶者と合同養取をするよう望む傾向がある。

Nukuoro 島における養子縁組はこのように生みの親のそれぞれが自分の子どもを養取者または養取者夫婦のそれぞれに与えるわけで、二つないし四つの関係のセットから構成されている。そして養取者または合同養取の場合は主たる養取者が子どもの実の親のひとりの血縁者であり、養取者夫婦が離婚した場合は、この主たる養取者に養子は引き取られる。

養出先は子どもの実の父または母の親族だが、親族からの養取の申し込みがあると子どもの実親にとって拒絶するのは難しい。とくに子どもの祖父母、実親のキョーダイや近しいイトコからの要請は断り難い。親族の絆の維持にかかわるからである。

Nukuoro の人々が養取の申し出を決然と断ることが出来ないのは彼らの行動規範と関係が深い。彼らにとって他者の所望や要求を拒絶するのは無作法なことである一方、要請することは相手——とくに親族関係のある——との関係を強化するのである。この要請する対象には、きわめて貴重な所有財のひとつである子どもも含まれ、他者の子どもを欲しがったり、自分の子どもの養出に同意することは親族としてまことに適切な行為なのである。従って親族に子どもが生まれることが判明すると、相手が本当に親族らしい親族か、すなわち親族として正しく行動するかどうかを確認する

ために養出を「試しにちょっと頼んでみる」のである。

頼まれた方ははっきりと断ることはできないが、好ましくない親族からの要請には先約者の存在をほのめかすなどして要請を取り下げてもらおう。しかし、誰かが養取を申し出ていることがわかると別の親族も養取希望を意志表示し、両者の競争となって、それぞれが子どもの親との親族としての関係の強さを競うこともある。また、たとえば子どもが母方親族の誰かに養取されると父方親族が不服に思うが、子どもの父親から、“My half goes to you”と言われてなだめられ、その子どもを——他の家族に育てられるようになって——「自分の子」として接することがある。あるいはその夫婦の次に生まれる子どもを「我々がもらう番だ」と自分たちの養子にすることを主張する。

養出した子どもに対して生みの親が殊更に生家に戻るよう働きかけることは道義に反するが、生みの親が誰であるかを隠すことは全くせず、むしろ養出した子どもと生みの親との日常的接触は頻繁に行われる。本来、子どもが住んでいる世帯がその子どもの実親もしくは養親の世帯とは限らず、子どもはどこに住んでも許される。ある親族の家から別の親族の家へとかなり自由に移り住むことができるのである。養子であってもその点は同様で、どこに住もうと許容度が高いから、生家に住むことも可能だ。

養子は生家でインセスト規制を保持したまま、養家においても原則としては養親の生みの子どもと同じインセスト規制を受ける。しかし、実際には養親を通しての規制は若干弱く、たとえば同一養親の養子どうしであっても、お互いに血縁関係がなく、同じ世帯で一緒に育ったわけではない場合にはその間の性関係は認められている。また、相手が養親の非養取配偶者が養取した子どもであればインセスト規制は問題にされない。

養子取りをする動機には次のようなものがあげられる。

ひとつはこの社会における子どもというものが持つ独自の役割より由来するものである。子どもは人々の強い愛情の対象となっているので周囲に子どもが存在することは人々に喜びをもたらすと考えられている。そればかりでなく、Nukuoro では少くともひとりの子どものみを配下に置いて初めて真の大人と見なされるので、子どものいない夫婦はもちろん、未婚の中年男性すら養子を欲しがるのである。

子どもはまた、家の内外で有用な家事や経済活動に従事する。少女は掃除、洗濯、お使い、年少のキョーダイの世話、タロイモ掘り、地炉焼きの準備などを、少年はココナツ採り、魚とり、コブラを売って現金稼ぎをすることなどを分担している。世帯内の性別役割分業が明確なことから小家族が基本的な生計単位であることから、一つの世帯に男女の子どもがいないと不完全と見なされ、養取によって欠けている方の性の子どもを手に入れるのである。また、生計単位が小家族であるため、夫婦が高齢化した時の家内労働力の確保を必要とする。その場合も養子を取ることによって解決できる。

養取および養出を行う動機のひとつに土地所有への欲求がある。これは土地制度や財産相続制度と結合して生ずる。Nukuoro ではかつては出自集団が土地を所有していたが、現在では個人所有であり、人々は自分の直系子孫へ土地が相続されることを求める。そのため後継ぎになる子どもがいない場合、養子を取る。養出する側から見れば、親は子どもを養子に出し、養取方の家族の土地・財産の後継ぎにすることにより、すなわち養出された実子を通して自分の直系子孫に土地・財産を取得するわけである。こうして土地の少い者が子どもを土地を多く持つ者に養出し、子孫に土地を取得する。

養子は原則として養親からも実親からも土地を相続することが出来る。しかし、実際には状況次第であり、実親から多くの土地を遺された者は養親からはもらわず、後者から相続する土地が多い

場合は前者からはもらわぬということが生ずる。生みの親は実子が養親から土地を相続することに満足し、養親は養子とその生みの親から土地を受け継ぐことに満足する。どちらの親もその子どもを「自分（たち）の子」と見なしているから、「自分（たち）の子」が他の家族から土地を相続するのを喜ぶのである。

前述したように養取／養出とは生みの親が子どもに関して持つ固有の権利・義務の移動である、と規定される。一般的には、たとえば実親 A から養親 B に子ども C が養取されると、C の福利に関する責務や監督の義務、継承・相続に関する権利・義務が A から B へ移動する。C には、実親 A よりもむしろ養親 B に従順で、協力的である義務が生じ、また配偶者選定において養親の許可を第一に求めねばならなくなる。また、しつけや教育に関しても養親の教示が最優先されるようになる。しかし Nukuoro の場合、生みの親の「固有の権利・義務が全面的に養親に移動する」とは言い難い。何故ならば、元来、系譜上、親の世代のすべての親族、すなわち類別的な父母と真の、および類別的な祖父母は、類別的な子ども全てに対して生みの親とほぼ同等の権利・義務を有しており、たとえば子どもがどこに住むかを決定する、子どもの承認されない行いに対して叱責し打擲する、子どもに労働をさせるなどの権利すら排他的に生みの親の権利であるとは考えられていないのである。このようにそもそも実の親が実の親以外の者とは明瞭に異なる内容の権利・義務を有しているわけではないので、養取関係の周辺には数知れない不分明が生じている。自分自身が養子なのかどうか分からない者、自分の子どもが養取されたのか、ただ連れて行かれて預ってもらっているだけなのか判然としない母親、生みの親と養親と周囲の人々がそれぞれ異なる見解を抱いているケース、ある人が養親の土地を遺されて初めて養子だったことに村の人々が気づいたケースなどがある。

彼らの養取慣行は彼らの親族関係の一面が表出されたものにほかならない。

彼らの親族間関係で最も重要なことは互酬的な sharing (分かち合い) の義務である。誰でも時間、労力、金銭、知識、技術、住み処、道具、舟、食物、生産物、その他何でも、子どもまで喜んで親族に——相手が必要としていなくても——提供し、また請求するべきとされている。そして要請された場合は頼まれた以上の莫大な援助をする。この相互依存のネットワークを維持することが個人の欲求より優先されねばならない。親族がいないことは、あるいは親族の間の絆が弱いということは敵意に満ちた世の中で孤立無援ということを意味するから。

この分かち合いが養取慣行に反映されて、「私」の親族は、台所道具を貸してくれ、と言うのと同じに「私」の子どもをくれ、という権利を有する。「私」には子どもを養出する義務があり、それを拒絶することは親族関係の紐帯がそこには存在しないということの意味するのだ。親の権利・義務が親族間で share されていることが母体となって彼らの養取慣行が存立していると言っても良いであろう。

2. Tonga 諸島民^⑨

西ポリネシアの西経173度—177度、南緯15度—22度に位置するトンガ諸島は三つのグループの島々から成る立憲君主制の国である。

ここでは他者の子どもを数時間ないし数日間預って世話をする *tokanga'i* ('to care for'), それより長期間にわたって預かるが子どもの親族関係上の地位や相続権などの変更はない *tauhi* ('to protect', 'the guardians') すなわち里子取りのほかに養子取りが行われる。非血縁者からの養子取り (*ohi*) もあるが、血縁者からの養取 (*pusiaki*) が圧倒的に頻度が高い (Morton の調査時には後者が97.5%を占めていた)。養取者のほとんどが子どもの父方または母方の類別的父母もしくは、真の、あるいは類別的な祖父母である。養子が養父母のどちらか一方と血縁関係がある場合、圧倒的多数が養

母の血縁者である。

養取の申し込みは分娩前か、母親と生まれた子どもに情緒的つながりが生じないうち、すなわち出産後数週間以内に行われる。実際の引き渡しは、Morton の調査によると満1歳以下が60%、満2歳以下が72%で、ほぼ離乳期に行われると見て良い。

養出決定に際しては子どもの両親がともに同意しなければならないが、母親の方が父親より関心が強く、養子縁組の取り決めの過程を支配する傾向がある。

養取交渉の時に特別な財の交換は行わないが、養子の実親と養親をより近しくさせるので相互の小さな贈り物の交換が頻繁に行われる。

養子のインセスト規制は、実親を通して血縁関係のある者はもちろん、養親との関係を通して適用されるので、配偶者を見出すのが困難であるといわれている。

この社会で養子慣行の存続を支えているのは、ひとつには、人の真の社会的成熟には「人の親となること」が要件とされる、という観念である。男にとっては、子どもを持つことはそれに必要な経済的、道義的責任を全うできるだけの資格——真の大人としての——を獲得したことを意味する。また女にとっても、子どもを慈しみ育てることに固有の高い価値が置かれている。そしてなによりも、第1子が生まれて初めて夫婦は親とは別個の世帯を持ち、大人としての義務や責任の大半を担うことが出来るようになると考えられているので、若い男にとっても女にとっても到達すべき目標は結婚を越えて「親となること」なのである。結婚しても子どもが生まれないことは従って大きな不幸と不満の原因となり、子どものない夫婦は一緒になっている理由がない、とすら言われる。そこで養子をもらうことによりその問題を解決する。

次に、世帯内外の日常的作業が性と年齢により厳密に分業化されているという点があげられる。10歳までには男子はココナツ採集や薪集め、家畜の世話などをして家族に物質的に貢献するようになるし、女子は多くの家事を手伝い、年少のキョーダイの世話をするから、男女の子どもを持つことが理想的とされている。もしも世帯内でどちらかの性の子どものみが欠けていたら、養取によってそれを補うのである。養取は従って役割分業体制維持のための人員補充という側面をも持つ。当然のことながら、養子としてどちらかの性の子どものみを選好される傾向はない。

以上のような文化的背景の下で養取者の方から積極的に養取の申し込みが行われるが、生みの親の方にも養出の動機がある場合もある。

ひとつは困窮者が子どもの将来の生活や教育を受ける機会を考えてより豊かな養取者に養出したり、妻が病んだり死亡した場合に夫が子どもを養出するなど、経済的理由や生活上の困難さゆえに養出するケースである。また、婚姻関係の不安定さも理由となり、たとえば夫が好まぬ妻の婚外子や、未婚の母親から生まれた子どもに正当な社会的地位を与えるためにも養取行為がとられる。

さらに養出の動機としては、困っている親族を援助し、親族関係の相互依存システムの中で友誼を固めたいという願望もある。子どもが沢山いる家族は、あたかも食糧が豊富にある家族が困窮している家族と分ち合うのと同じく、子どものいない家族に子どもを分ち与えるのである。

Tonga 諸島民の社会では互酬的な sharing が原則であり、すべての財とサービスが分ち合われる。人々が互酬的行為をする相手は近い親族のみならず単なる知人にまで及ぶが、子どもの交換は親族の間の取引きには限定されている。何故なら子どもはきわめて価値のある資源であるので親族の枠内に留めておきたいし、親族こそ彼らにとって子どもの幸福を委ねるのに信頼に値する人々だからである。要するに養取行為は親族の間の全体的な互酬システムの中で、ひとつの資源としての子どもの交換を行うことであると言っても良い。

彼らの基本的な生産と消費の単位は *api* と呼ばれる集団で、これを構成しているのは小家族も

しくは小規模の拡大家族である。血縁関係のある *api* が複数集合して *matakali* という居住集団を構成している。この *matakali* は構成範囲が画然としていず、その headman と双系的につながる者が headman と同じ集落に住むことによって成員権を得る。*matakali* は Tonga の平民クラスの者にとり最も包括的な corporate group で、資源の sharing に関して重要な単位である。この集団の成員の間で財とサービスの交換が最も頻繁に行われるが、養取もそのひとつである。養取行為によってこの地域的集団の維持と永続化が保障されると言ってもよいであろう。

3. Ellice 諸島民^⑨

ギルバート諸島の南方に浮かぶ西ポリネシアのサンゴ礁の島々から成る。

tamapuke (*tama*: child, *puke*: to take) と言われる養子と、*tamatausi* (*tausi*: to take care of, to guard) と言われる里子に概念上区別され、いずれも基本的には親族の間でやり取りされる。

夫婦が合同で養子縁組を行い、二人がひとりの養子の養親となる場合もあるが、たいていは夫婦のいずれかが養親となり、養子縁組をする。Brady の調査によると前者のケースは全体の11%に過ぎず、圧倒的に夫あるいは妻による単独養子縁組が多かった。養出の年齢は建前は何才でも可能だが、Brady の報告では2歳未満が29%、2歳から16歳の間が66%、16歳以上はわずか5%であった。

養子の性別に関する選好はあり、Brady の調査時には、単独養子縁組の場合のみ見てみると、男子養子が男子養親に養取されるケースと女子養親に養取されるケースの比率は2対1であった。一方、女子養子について見れば養親が男子の場合と女子の場合とはほとんど同数であった。単独養取においてはこのように養子として男児がより多く選ばれている。単独養取に夫婦による合同養取を加えた場合も男子養子の割合が高く(62.7%)、Ellice 諸島における養子は男子が選好されるという傾向が看取される。その理由として、Brady は、(1)Ellice 諸島では居住規制および継承・相続の制度において伝統的に父系的な偏向が見られること、(2)出稼などで家庭を離れ、家内の労働分担に欠損を生じさせるのは女より男であるから、男子養子への要求の方が大きい、という二点を挙げている。

親族間で養子縁組の契約をした場合、ささやかな宴を催すこともあるが、決して盛大な祝宴を公開して行うことはない。非親族との縁組の場合には単なる口頭での同意ではなく有効性の根拠を明確にしておく必要があり、養取者と養出側の間で小さな贈物の贈答が何度も行われる。

インセストについては養子は実親、養親の双方を通して規制を受ける。

養子縁組の動機として以下のようなものが挙げられる。養取側の理由としては、実子が生まれないう、片方の性の子どもしかない、老人世帯なので労働力が必要である、後継ぎが欲しい、実子にキョーダイを与えてやりたい等、家庭内役割分業体制の欠損部分を補完するという目的が共通している。養出する側の理由は、経済的困窮、子どもの父または母の死、父母の転出や離婚等、家庭生活の不安定性とともに、実子の数が多すぎることも理由となっている。

Ellice 諸島の各島には島民全体の共有地が若干あるが、その他の大部分の土地は corporate group の所有地である。この corporate group は村落の一區画に近接して居住する世帯群から構成される。一方、各村落にはいくつかの *ramage* が含まれる。出自は双系的認識をしているので各個人は父方の *ramage segment* と母方の *ramage segment* の両方の親族ネットワークの中に位置づけられる。そしてひとつの *ramage segment* に生まれた兄弟たちが核となって土地を保有する集団、すなわち corporate group をつくっているのである。子どもは双系的認識の下では本来、父および母の出身した二つの corporate group と結びついている。しかし、子どもの父母が

婚後居住地をどこに定めたのか、また父、母それぞれの出身集団のいずれの保有地への権利を選択したのかによって、子どもの帰属する corporate group が定まる。

養子は養親を通して養入集団の土地用益権を獲得するが、だからと言って養出した corporate group の土地の継承権を失うわけではない。可能性としては二重に継承権を持つ。しかし、たとえば養入集団の土地に対する権利が確実に継承されることが予測できれば養出集団の土地への権利は継承させないこともあり、養子の土地に対する権利獲得は状況次第で変更する。しかし、とにかく養出集団あるいは養入集団のいずれかによって養子の土地権は保護されるから、土地のない人々の出現は抑止される。養取はこの点で共同体への吸収のシステムであり、排外するシステムではないと言えるであろう。

一般的に言えば、養取は生みの親の持つ優先的権利および義務を他者つまり養親に委譲することだが、Ellice 諸島の社会でも Tonga と同様、生みの親と同世代か一世代上のキンドレッド全員が「親」としての権利・義務を潜在的に獲得している。養取者は基本的にはこれら類別的な父母や祖父母であるから、養子縁組は多くの場合、既存の、しかし潜在的に所有されていた「親」としての権利や義務の再配置であって、そもそもそうした権利・義務を全く有していなかった人物に移転するというようなものではない。

里子慣行も同様に、子どもに対して潜在的に権利・義務を持っていた類別的的父母や祖父母のネットワークを利用して、子どもを一時的に短期間預ける制度であり、里子の社会的地位に変更がない限り相続権は生みの親を通してのそのままである。また、インセスト規制は、たとえば里子にとり相手が里親の子どもであっても第四イトコ以上に遠隔の間柄であれば配偶関係が許されるなど、養取された場合と比較してやや緩やかである。

4. Samoa 諸島民^③

西ポリネシアの南緯13度～14度、西経168度～173度にひろがる諸島。Upolu 島と Savaii 島を中心とする独立国 Western Samoa と Tutuila 島と Tau 島を中心とする American Samoa に分かれている。

Samoa においても養取慣行がきわめて盛んで、養子は現地語で *tama fai* ('made child') もしくは *tama vavae* ('separated or divided child') と言う。里子は *tausia* と言うが、それは生家とは異なる家で生みの親以外の者に世話をしてもらっている者を指す。Samoa では年長の姉が年少のキョーダイの面倒を看るのが一般的な養育形態なので、生みの親の手を離れるのみならず、育てられる世帯が変更されないと里子とは言えない。里子が生ずるのは①日常的家事労働への補充が必要、②家族から離れて学校や職場の近くに住む方が便利である、と言った理由による場合が多いが、元来、Samoa の子どもたちの間では友達や気に入った親族と住むために、長期間生家を離れたり、住み処を変えたりすることが簡単に行われているので、そうした Samoa の子どもの生活特性も里子慣行に与っている。

養子が里子と異なる点は前者においては子どもに関する主要な権利が養出者から養取者へ移動することである。伝統的にはこの権利の移転は養取側から子どもの生みの親にマットを贈ることによって承認されたが、現在では行われていない。現在は両者の間で食物の交換が行われることがある。

概念上、以上のように養子と里子は区別されるものの、個別の事例では判別し難く、また曖昧な場合がしばしば見られる。養子にした子どもなのか、それとも単に預って世話をしているだけなのか判然としないという場合も多く、また、里子として長期間預っている間に親愛感情が募り、養子

にしまったケースもある。現実生活の中では養子と里子が必ずしも明確に区別されているとは言い難い。

Western Samoa における Shore の調査によれば、養取時の養子の年齢は全体の三分の二が5歳以下であった。里子の開始年齢は、正確な把握は困難だが、里子取りの理由から考えて養出年齢よりかなり高いことが推測される。里子の半数は生徒とくに中学生であった。学校近く家庭に里子として入り、そこから通学しているのである。

養子・里子の性別についてはともに女子より男子の方が多く、とりわけ養子縁組においては男子への顕著な選好が見られた（男子61.2%、女子38.8%）。これは養子取りの理由とも関連性がある。養取の主な理由として実子がいなかったことが挙げられ、後継ぎとしてはもちろん、高齢化した時の家事労働やボランティア労働の分担者として養子を取る。こうした労働において男子の果す役割が重要なため、養子に男子がより好まれる。

養出の動機として、子どもの生みの親の病気や死亡、その他の理由で子どもを育てることが困難な状況が第一に挙げられる。婚外子などもしばしば養出される。こうした状況ではふつう子どもの母方の祖父母など近いキンドレッドが養取する。そのため、親族間の養子縁組の中でも子どもの母方親族が養親になる傾向が強く、Shore によれば養子縁組全体の54%を占めており、一方、父方親族による養取は27%であった。母方親族の中でも母方祖父母が養取した例は養子縁組全体の24.7%にもわたっていた。

ところで父方親族による養取の約二分の一が子どもの父方オバによるものであった。Samoa においては父の姉妹が自己にとり最も尊敬すべき地位にあり、男子とその子どもは彼の姉妹とその子どもを敬愛する義務がある。それを表現し、兄弟と姉妹の強い紐帯を象徴するために兄弟は子どもを自分の姉妹に贈呈するのである。

この社会における基本的な親族行動はあらゆる資源の sharing と相互扶助である。子どもも貴重な資源のひとつであるから、親族から養取を申し込まれたら拒否することは出来ない。要請に応じて子どもを差し出すことが親族としての正しい行動なのだ。親族に養出を要請されたら拒否できないということは、生みの親と実子の関係が簡単に切断される脆弱な、不安定な側面を持つことを示している。一方、養子は養家の子どもとして、養家の実子よりも血縁的続柄関係が離れているだけにより一層適切な親族行動をとることが期待されている。それによって初めて養家における正当な地位を要求することができるのである。従って養子は実子に比べて養取集団に対してより奉任をし、忠誠的行為をとらねばならない。そして、養親の方も、親としての義務を果たし、正しい行動をとり、人々にそれを示さねばならない。このように養親と養子の関係は文化的規範として緊密であり、実親と実子の関係よりも安定したものである。

以上の家内的養取のほかに、政治的効果を意図した養子取引も行われる。たとえば、村落の人々と親族関係のない転入者である牧師が村人の子どもを養取し、地元で親族関係を創出すると、彼はもはや村の人たちにとり全くの stranger ではなくなり、日常生活の諸相で村人たちから親族としての支援を受けられるようになる。一方、養出家族の方も牧師とその家族から経済的支持を得ることを期待できるようになるし、社会的威信も獲得する。このように双方に利をもたらすのである。さらに親しい友人の間で養子縁組をして両者の絆を強めて親族的紐帯の創出を企図したり、相互に数世代の間、養子の授受を行うことにより政治的連帯を樹立しようとするなどのことが行われる。なお、親族間の養取の場合でも、養子はしばしば生家の親許を訪問させられ、養家と実家の間の食物その他の贈物の互酬的交換の媒介者としての役割を果たすことを考えあわせると、養取慣行の重要な役割のひとつが二つの集団間の絆の増強であることが明らかとなる。

Ⅲ 養取慣行の過程・動機・機能

以上四つの社会の養取慣行を概観したが、ポリネシアの養取慣行の特徴をまとめると次のようになるであろう。

まず、ポリネシアでは非常に頻繁に養取が行われるという事実が指摘される。しかも、子どもを養出した親がスティグマの対象になることは全くなく、かえって子どもを譲ったという寛大さが高く評価される点が注目される。

養取される子どもと養親の間には多くの場合、血縁関係がある。とりわけ、子どもの生みの母ないし父の実のキョーダイ、類別的キョーダイ、あるいは祖父母、類別的祖父母といった直系もしくは近い傍系のキンドレッドが養取者であるケースが多い。

養子縁組の端緒を切るのは子どもの生みの親であるよりもむしろ、養取希望者の方からで、妊娠が判明すると要請もしくは打診がなされる。時折、子どもの父親が政治的野心から高ランクの親族に養出話を持ちかけることもあるが。養取契約の時期は、妊娠中か遅くとも出生後まもなくで、母子の情緒的絆が築き上げられる前が良いとされている。子どもの実親が近親者からの申し出を拒絶することは困難で、一般には受諾される。

養取者は原則として個人であって、夫婦単位の合同養取ではない。しばしば独身者による養取すらある。しかしながら、養出側は実子の福利安寧のために養取者に配偶者がある場合は配偶者とも養取契約を結ぶことを理想とする。生みの親の方も子どもに関する権利は父母が合同で持っているわけではなく、妻および夫の個々人が各々の権利を子どもに対して持っているので、原理的には養取者は子どもの実の母および父のそれぞれと養取契約を取り交すことになる。だが実際の取り決めの過程で主導権を握っているのは子どもの母親である。それがため Samoa のように養取者として子どもの母方親族に比重がかかることも生ずる。

養取契約が成立すると、小さな贈物の交換か、養取予定者から子どもの実親へのささやかな贈与が行われるが、大きな祭宴は催されることはない。

子どもが実際に養取者の世帯に引き取られるのは離乳期が最も一般的である。(元来、離乳の一手段として子どもを近親者の世帯に預けるという慣習があった。)そして養出後も子どもと実の親との接触・交流は頻繁に行われ日常的に往来したり食物などの贈与交換が行われる。

一方、養取した者は養子に対して適切な保護と養育を施しているかどうか、常に共同体全体の注目するところとなるので、養子に対しては殊更、注意深く、大切に扱う。

養子縁組は一組の親の子どもから他の親の子どもへと社会的地位の変更を随伴する。この地位の変化によって子ども自身の権利・義務にも変更が生ずるはずであるが、ポリネシアの場合、それが非常に明瞭とは言えない。

まず、土地に関する権利(用益権、相続権)は、実の親を通して保有していたそれを剝奪されることなく、養親の子どもとして新たに権利が付加される。しかしこれは原則であって、実際の運用にあたっては本人が養親に対してどれほど忠実に子どもとしての親族行動に適ったことを行ったか、また、実の親との緊密さ、養親と実親それぞれの土地保有程度などにより、子どもが養親、実親から相続する土地に関する権利が決ってくる。状況に応じて養子は実親を通して得る権利が皆無になったり、養親からのそれが皆無になったりするるのであるから、明らかな権利関係の変更を伴うとは言えないであろう。

また、インセスト規制に関しても、原則として養出した者でも実親を通して配偶相手の選択が規

制され続ける一方、養親の子どもとして養親の実子と同じ立場でインセストが禁止される。ただし社会によっては若干、後者の立場での規制が弱いところもある。

養取慣行がきわめてさかんであるということは、養取する側にも養出する側にもその強い動機があり、子どもは生みの親が育てることが最善であるというイデオロギーを凌駕していることを示している。

人々の語る養取の動機として、後継ぎとなる実子がいらない、家事的領域における性別役割分業が極めて厳然としているにもかかわらず片方の性の子もしかない、老齢期に入り家事労働力の補充が必要である、など世帯の社会的・経済的欠損部分を補完する目的が挙げられる。これに対して養出の動機は、生みの親、ことに母親の病気や死亡、生みの両親の離婚、生みの親の経済的困窮など、養出方の生活条件の劣悪さ、不安定性が挙げられる。こうした理由によって集団の構成員を他出させたり、他から編入させたりせねばならないのは、これらの社会において生計単位が基本的には小家族によって構成されているからである。

しかしながらポリネシアの養取慣行に関してもうひとつ特徴的であると思われることは、上述のような理由がなくとも養取・養出が頻繁に行われることである。たとえば実子がすでに数人いるのに養子を取る、実の両親が安定した生活を築いているのに子どもを養出する、などのことは日常茶飯事である。これは、養出者と養取者の大半が親族関係にある事実とも関連づけられるが、親族行動の基本原則の表現であり、親族関係の確認または再編成のための行為であると見なすことが出来る。

ポリネシアにおいて親族関係を律するのは互酬的な義務で、なかでも最も重要なことは物事を share することである。資源は言うに及ばず知識、技術、時間、労力、子どもにいたるまで、親族が困っていてもいなくとも提供し、援助しなければならない。相手がたとえ必要としていなくとも、食物や道具の分ち合いを申し出、また子どもを使い走りや手伝いに貸すべきなのである。何事かを頼まれた時には頼まれた以上の莫大な援助を与える。たとえば、病気の親族に数時間の子守りを頼まれたとしても一週間子どもの世話を引き受けたり、ココナツを2、3個欲しいと言われれば木一本分のココナツの実を与えたりする。これが親族としてのあるべき行動規範なのだ。

ポリネシアのように双系的な出自認識のある社会では、原則として個人は父親と母親を通して双方の親族集団との結びつきの可能性を持って出生するが、両親の居住地や集団帰属によってそのうちの一つの集団との結合が強まる。系譜関係によって一元的に帰属集団が定められる社会とは違い、キンドレッドのカテゴリーは境界線が明確ではなく、周辺に接近するほど親族認識は弱まり、やがてキンドレッドのカテゴリーから剥落してゆく。このような親族組織の下では系譜関係以外に親族関係の紐帯を規定するような規範が必要である。Shore は sharing という親族行動をその規範の根幹に位置づけている。^⑤

このような行動体系の中で、子どもをあたかも財を貸借したり贈答したりするように他者に養出したり養取したりする。それによって、疎縁になっていた親族との関係を新たに創出したり、現に存在している関係をより強固なものにしたりすることができるし、また家事的労働力の欠損する世帯に必要な応じた人員を配置させ、後継者を欠く世帯に適切なメンバーの補充を行うことができる。集団の内的紐帯の強化すなわち統合と集団の構造的連続性の維持がこの養取慣行の重要な機能のひとつであろう。^⑥

Ⅳ 「親であること」の検討 ―むすびにかえて―

第Ⅱ章の冒頭で、養子取りを生みの親が子どもに関して持つ法的権利・義務を生みの親以外の者に恒久的に譲渡することと規定し、その権利・義務を一定期間のみ他者に委任・代行させるものを里子取りとしてこの二つを区別した。この区別はこれまでのオセアニア地域の養子・里子研究において採用されている方式である。

養子と里子はまず第一に、前者は恒久的、後者は一時的という、期間の違いによって峻別される。第二に、生みの親が子どもに関して持つ権利・義務が完全に移動するのか、それとも一部分のみ移動するのか、という違いがある。この二点を指標にして現実に施行されている養取慣行を二元化することは少くともポリネシアに関しては妥当性に問題があると思われる。

第一に期間の問題である。里子は一定期間のみ預けられると言うが、その開始にあたって、海外出稼ぎ移住や病気治療等、かなりの程度将来の予測が立てられる場合以外はなかなか期間を定め難く、里子と単に逗留しているだけの子どもの区別がつきにくいばかりか、長期に及んで養子同様の期間になる里子もある。また、養子とされた子どもでも長ずるに従い、生家に逗留する方が長くなるケースも多い。元来、子どもは生家、養家を問わず定まった家で宿泊するよう強制されないから宿泊先を比較的容易に変えることができる。従って逗留期間は厳密な意味では指標になりにくい。

次に生みの親が子どもに関して持つ権利・義務を全面的に委譲するのか一部分のみ委任するのかという点である。たとえば、他地域においては養子と里子の間に最も端的に差異の表われる相続・継承権の移動の有無も、ポリネシアでは截然としていない。養出した子どもは生みの親からも養親からも相続・継承する権利を持ち、里子同様に生みの親からの権利を剝奪されない。だが、現実には経済的事情や子どもと生みの親や養親との間の社会関係など個々の状況次第で双方から相続したり、片方から相続したりすることになる。このように相続・継承権に関して養子と里子の間に明確な境界線を引くことが出来ないことを考えると、子どもに関する親の持つ権利・義務の移動に基づいて養子縁組と里子縁組を二元化することは、分析概念としては有用であっても、ポリネシアの養取慣行の現実の分析には不適切であると言ってよからう。

生みの親が子どもに関して持つ権利・義務を全面的に委譲するのか一部のみの委任か、という問題は、生みの親その人が子どもに対してそれ以外の人は持たない特別の権利・義務を持っているという前提の上に成立っている。何ごととも share するのが原則のポリネシアで、生みの親のみ絶対的に持っている権利・義務というものが存在するのだろうか。養育の義務、打擲する権利、子どもがどこに住むかを決定する権利などは、生みの親のみならずそのキョーダイつまり子どもの類別的父母や祖父母が子どもの出生と同時に share し、潜在的に持つものである。それを養取によって類別的父母や祖父母が全面的に獲得すると言う時、権利・義務の移動は鮮明とはならない。

では、生みの親が類別的父母たちと子どもに対して完全に同等の地位にあるのかと言えばそうとは言えず、ポリネシア諸社会においても、その社会の規範に従って子どもを養育し、子どもの利害を追求し、子どもの権利を擁護する責任を最大に担っている存在があり、本来それは生みの親である。Brady はそれを「第一次的法的親性 (primary jur^{おや}al parenthood)」とし、「生物学的な親性 (natural parenthood) とは異なって移動可能なものと見なしている。また子どもが生まれると同時に「類別的親」と分類された者が生みの親の持つ責任を share せねばならないところに存するものを「二次的法的親性 (secondary jur^{おや}al parenthood) と規定している。^⑦

これにならば養子縁組とは「第一次的法的親性」の委譲であり、「類別的親」が養取した場合は「第一次的法的親性」と「第二次的法的親性」の交換ということになる。一方、里子取りは「第二次的法的親性」はそのままに、「第一次的法的親性」の一部が里親によって代行される状態を言うことになる。だがこの「第一次的法的親性」が社会生活の諸相でどのように顕現するかは社会によって異なるから、その内容を一元化することは Carroll も言うように危険である。^⑨

親性、換言すれば「親であること」について Goodenough は、当該文化独自の方式に従って社会的存在としての個人の間で share され、委譲され、委任され、放棄され、循環する権利の複合体と見なしている。^⑩ いかなる人間社会にも子どもに対して「親」は存在するが、「親のあり方」は文化的構築物なのである。ある社会で子どもの養育が生みの親の生物学的に規定された責任であるとされているからと言って、他の社会においてもそう考えられているとは限らない。ポリネシアのように親族ネットワークの中で子育ての責任が share されている社会もあるのだから。

註

- ① 基礎資料は Carroll, V. 1970b
- ② 基礎資料は Morton, K. L. 1976
- ③ 基礎資料は Brady, I. 1976b
- ④ 基礎資料は Shore, B. 1976
- ⑤ Shore, B. 1976 : 172
- ⑥ Brady, I. 1976 : 270, 277—78
- ⑦ Ibid. : 7
- ⑧ Carroll, V. 1970 : 9
- ⑨ Goodenough, W. H. 1970 : 399—407

引用文献

- Brady, Ivan 1976a "Problems of Description and Explanation in the Study of Adoption," In *Transactions in Kinship: Adoption and Fosterage in Oceania* (ed.) Ivan Brady, Honolulu : University of Hawaii Press.
- 1976b "Socioeconomic Mobility : Adoption and Land Tenure in the Ellice Islands," In *Transactions in Kinship: Adoption and Fosterage in Oceania* (ed.) Ivan Brady, Honolulu : University of Hawaii Press.
- 1976c "Adaptive Engineering : An Overview of Adoption in Oceania," In *Transactions in Kinship: Adoption and Fosterage in Oceania* (ed.) Ivan Brady, Honolulu : University of Hawaii Press.
- Carroll, Vern 1970a "Introduction : What does 'Adoption' mean? " In *Adoption in Eastern Oceania*(ed.) Vern Carroll, Honolulu : University of Hawaii Press.
- 1970b "Adoption on Nukuoro" In *Adoption in Eastern Oceania* (ed.) Vern Carroll, Honolulu : University of Hawaii Press.
- Goodenough, Ward H. 1970 "Epilogue : Transactions in Parenthood" In *Adoption in Eastern Oceania* (ed.) Vern Carroll, Honolulu : University of Hawaii Press.
- Morton, Keith L. 1976 "Tongan Adoption" In *Transactions in Kinship: Adoption and Fosterage in Oceania* (ed.) Ivan Brady, Honolulu : University of Hawaii Press.
- Shore, Bradd 1976 "Adoption, Alliance, and Political Mobility in Samoa" In *Transactions in Kinship: Adoption and Fosterage in Oceania* (ed.) Ivan Brady, Honolulu : University of Hawaii Press.